

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	19H05592	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和5(2023)年度
研究課題名	中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	藤井 純夫 (金沢大学・国際文化資源学研究センター・特任教授)

【令和3(2021)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(研究の概要)		
<p>本研究は、これまで都市に集中してきた中東考古学と一線を画し、古代文明の狭間で生き延びてきた遊牧民社会に焦点を当て、その形成過程を考古学のみならず、形質人類学、分析科学、碑文学、文化人類学など多角的な観点から迫り、今日の中東社会の根幹をなす部族社会の特質を考察するものである。</p>		
(意見等)		
<p>本研究は、中東地域の遊牧民社会の成立を解明することを目的としており、都市遺跡の調査に偏っていた従来の中東考古学に一石を投じる重要な内容を有する。研究の進捗状況としては、新型コロナウイルス感染症の影響による現地調査の延期以外は順調に進展が認められる。</p> <p>第1の研究課題である「編年プラットフォームの構築」については、銅石器時代後半の乾燥化を契機に、ヨルダン渓谷から流入した半定住農耕遊牧民が遊牧民に変質した点を発掘調査によって明らかにした。これまで確認されてきた先土器新石器時代 B と前期青銅器時代の2度の遊牧化の間に、もう一つ別の遊牧化が存在した点が判明した意義は大きい。また、サウジアラビア北西部の調査によって、バンド組織から拡大家族組織への居住単位の変化が墓制の変化と相関関係にあることをつきとめ、前期青銅器時代までの編年を確立した点、紅海東岸における調査において、歴史文献を参照し都市構造を明らかにした点、さらには碑文分析から近現代に至る地域遊牧民の歴史を復元した点は、基礎データの確立という点から高く評価できる。</p> <p>第2の研究課題である「遊牧化過程の動態研究」においては、3次に及ぶ遊牧化における家畜組成、集団構成、遊牧化の実態を示す遺物の分析データが出始めており、順調に計画が進んでいる。一方で、現地調査の延期を強いられ、研究の遅れが危惧されるが、対策が既に十分に練られている点は、計画性の高さが感じられる。また、僅か3年間で日本語、英語の論文を多数公表している点も高く評価できる。</p>		